

今井源衛校訂 『依田学海 墨水別墅雑録』

石田, 忠彦
鹿児島大学教授

<https://doi.org/10.15017/11964>

出版情報 : 語文研究. 64, pp.76-79, 1987-12-15. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :

今井源衛校訂『依田学海 墨水別墅雜録』

石 田 忠 彦

泉鏡花晩年の小説に『薄紅梅』というのがある。鏡花の文章を要約するほど興冷めなこともないので、やや長文にわたって恐縮だが、次にその冒頭を引いてみる。

麴町九段——中坂は、武蔵鏡、江戸砂子、惣鹿子等によれば、いや、そんな事は何うでもいゝ。此のあたりこそ、明治時代文芸発程の名地である。嘗て文壇の梁山泊と稱へられた硯友社、その星座の各員が陣を構へ、塞頭高らかに、我楽多文庫の旗を翻した、編輯所があつて、心織筆耕の花を咲かせ、綾なす霞を鸞鷲かせた。若手の作者よ、小説家よ！……天晴れ、と一つ煽いでやらうと、扇子を片手に、当時文界の老將軍——佐久良藩の碩儒で、むかし江戸のお留守番と聞けば、武辺、文道、両達の依田学海翁が、一夏土用の日盛の事

……生平の揚羽蝶の漆紋に、袴着用、大刀がはりの杖を片手に、芝居の意休を一ゆがきして洒然と灰汁を抜いたやうな、白い髻を、爽に扱きながら、これ、はじめての見参。……

ここに、明治三十年頃の依田学海の面影は、鏡花によってみごとに描かれている。武人にして儒者、そして文学者、それに何よりも

意休ばりの白髻がそのトレード・マークであつた。(本書口絵写真参照) この小説で学海は今一度通人として登場させられている。作中人物の一雪が「駿河台へ通つて、依田学海翁に学んで」いるということが知れると、若い女性のことゆえ、まさか『紅樓夢』ではあるまいかと話題になり、とくにその教え方が、説くのか教ゆのか授くのか案外施すのではないかと一同が心配するところである。

学海施一雪紅樓夢や不可え。あの髻が白い頸脚へ触るやうだ。このような依田学海は、鏡花が小説に登場さすほど愛着のある人物であつたわけだが、現在、我国の近代文学史の中ではほぼ忘れられてしまつてゐる。それでは依田学海とはどういう人か。

我国の近代文学の創始者を坪内逍遙におくのは定説だとしても、最近ではその席が二葉亭四迷によつて脅かされている。いや、佐藤春夫のように森鷗外にその位置づけをする人もすくなくはない。しかし、そのいずれに創始者の栄光を与えるにしろ、その先行者の存在は認めねばならない。成島柳北はすぐ頭に浮かぶ。勿論依田学海もその一人である。

学海的位置は、逍遙や鷗外に対する呼び方で分る。逍遙を「坪内

某」と呼ぶ（坪内某か訳する所の院本シリヤスシーナルをよむ。日記 17・2・2）。また鷗外については、すでに幼児より漢文を教えている（林太頼敏にして沈毅、尋常の年少に同じからず。日記 17・8・9）。このような学海は、逍遙が登場する直前の文学界では権威であった。そのため、逍遙も『該奇奇談 自由太刀余波銳鋒』

の序文を求め、矢野龍溪は『経国美談』の評を依頼した。この事情は数年後の幸田露伴の『露団々』（明22）においても変わらない。学海の仕事は多岐にわたっているが、その主なものへの文学的評価を紹介してみたい。

漢詩文の業績を高く評価する人は多いが、「まことに学海は才敏捷の人であった。したがってその文章も才にあまりがあつて平易に失し氣にあまりがあつて荒ら荒らしきに失した弊がある」（三浦叶「明治の漢文」と評価する人もいる。

明治以降において、近世の文人や文学者の評伝や批評は学海がはじめて行ったといえる。とくに瀧沢馬琴好きなのが目立つ。『八大伝』などは、その勸善懲惡性ゆえをもつて高く評価した（曲亭——仁義礼智信の五常を根基とし童幼婦女の道德の何物たるを知らざるものをして自ら識らず知らず仁義の道を曉らしむ「南総里見八大伝」明20・10（21・3）。勿論これには山田美妙が「儒教の外には宇宙の中に猶秀れた教は無いものと妄信して居た時代ならその様な評も褒められまじやう。」とやんわりと反論した（「学海居士里見八大伝批評の第一」明21・9）。

批評家としての学海の批評基準は驚くほど明解である。勸善懲惡主義である。往年の儒学者の価値基準は明治になつても微動だにしない。学海は、ドストエフスキーの『罪と罰』にも勸懲の寓意をみ

ようとした（「孝女一信友を写して。社会の悪風を矯正せんとするものと見えたり。誰か小説は勸懲を主とせずといふや。」「罪と罰の評」明25・12）。さすがに、北村透谷が「聊か当惑するところなき能はざりし。」（「罪と罰」の殺人罪」明26・1）と反論することになる。このような批評態度は二葉亭四迷の『浮雲』に対しても尾崎紅葉の『多情多恨』に対してもかわらない。紅葉の描く「主人公たる驚見某は、即ち今の洋学者流にして仁義礼智の教育なきものの標本なり」と酷評されている。『多情多恨』という小説は、『源氏物語』の影響を受けながらも、性格と心理とを写實的に描き、また近代口語体を定着させた、明治二十年代では完成度の高い作品であるなどという評価は、このような学海の批評の前ではいうのも野暮だという気さえしてくる。吉田精一氏の言を借りれば「逍遙・二葉亭が切りひらいた近代文学以前の評家の一典型」ということだろう。

芝居好きの学海がみずからも戯曲を書き、その改良に努めた演劇においても、その勸懲の主意は明白であるが、演劇改良においてとくに目立つのは極端な史実主義である。学海の意図は史劇の改良にあり、それを徹底した史実の探索に基づいて行おうとした。そのため梨園の内側からも、また坪内逍遙などの外側からも批判されることになった。逍遙は、「識、学、見共に高く、且つ最も斯道に熱心なる老いてます／＼壮大なる一家」が、極端な史実主義に陥ろうとしている（史劇の外道に流れんとす）ことを「歎惜」しながら、学海の史劇は、「舞台を考古的博覽場」とみなした（「一種の演義的野史」であると批判する（「我が邦の史劇」明26・11）。おそらく、学海の史実主義は、演劇論であるというよりも儒教的実的思想に基づいた倫理観に近いものであるといえるだろう。

以上が学海に対するおもな文学的評価であるが、このように、学海という人は、いわゆる御一新後もその思想性や生活信条にほとんど動揺をきたさなかった人物だといえる。かといって、頑迷固陋かという点必ずしもそうではない。稗史小説を好み、愛妾と芝居見物に出かけ、風流の友と季節の移りかわりを賞でて漢詩文を作るという風流人でもある。とすると、学海を評価する場合に必要な視点は、すでに越智治雄氏の疑問にある。「新時代における彼の有効性の有無」ということであり、これが近代文学を研究する者の課題となるものと考えられる。

ところで、近代文学の研究の現状は、昭和四十年ごろより、作品論研究が主流となり、かつて、たとえば塩田良平氏の『樋口一葉研究』にみられるような作家論研究はほとんどなされていない。たとえなされていても、弊履のごとく捨てて顧みられない、といったら比喩が過ぎようか。芳賀徹氏のいわゆる「貴族の学問」ばかりが栄えて「農奴の学問」は冷遇されているといえる。文学研究が作品研究であるのは当然のことなのだが、作品論研究の隆盛ないし狂い咲きは、研究者が自己の文学的才能と思われるものをふりかざして、研究対象である文学者の作品を乗り越える競争であるかのような光景ともいえる。そのような時に、今井源衛先生の『依田学海墨水別墅雜録』が刊行されたのは、むしろ痛快事である。

本書は、依田学海が、月に数回通う妾宅でつけた、明治十六年から三十二年までの漢文体の日記である。その内容は、本書「解題」及び「依田学海の愛妾瑞香とその家族」（『文学』昭60・3）に詳しくので省略するが、一読、種々のことを考えさせられる。

それは、まず第一に、「一身にして二生を經る」ことになった人間

の精神性の問題である。福沢諭吉は、「二生を經る」幸運をいっているのだが、そのためには強靱な精神が必要であったことはいうまでもない。彼らにとつて明治新時代とは一体何だったのか。成島柳北の「新時代における——有効性」は、前田愛氏によってすでに評価されている。とすれば、依田学海は今からである。柳北ほど新時代を相対化できなかった学海の場合はおのずと別の視点が必要であろう。やや遅れてきた幸田露伴評価については、西欧型の近代とは別の「もうひとつの近代」の視点が猪野謙二氏によって示されている。夏目漱石についてもその「反近代」をいう三好行雄氏の視点がある。これらの、「西欧を基準にしてその歪みを正すという上昇志向」の近代とは別の「もうひとつの近代」の系列に、学海は、組み込まれるかどうか。

そして、この問題を考えることは戦後文学を検討する際にも、ある示唆を与えてくれる。明治維新と敗戦とをパラレルに並べてしまふことは誘いもあるが、戦後を拒否したところに自己の文学を置いた作家もいたが、いわゆる戦後に多くの文学者達がみごとに順応していく。つまり戦後の新時代に乗り遅れまいとする精神の類型を明治にも見ることが出来る。

第二に、漢詩文による表現の問題である。文学者は文体を選んだ瞬間にすべてが決定されている。漢詩文という、日本語でも中国語でもなく、また、日本語でも中国語でもある文体を明治という激変の時代になお選んだということはもっと考えられてよい。学海が、妾宅における日記の文体に漢文体を選んだということは、おそらく虚構意識であろう。そのことは、この日記に書いてあることが嘘であるという意味ではない。退屈なぐらい、いわゆる事実の羅列であ

る。毎年、梅の遅速を愛し、桜の散るのを恨み、柳絮の動きに目を見張る。それらが毎年まるで判で押したように書き連ねられていく。そこに、学海の秩序感覚が読みとれるのである。また、たくまぬ抵抗の姿勢が読みとれるのである。その意味で、学海の関心が、滅びゆく旧幕臣にあったことはまちがいが無い。たとえば、成島柳北の死や、その後のその家族の零落ぶりは克明に記されている。漢文体で書かれた事実という虚構の中に、学海が、押し寄せる波から自己及び一族の生を守りぬいているのが読みとれるのである。

第三に考えさせられるのは、近代文学と儒学思想との関係である。これは、近代文学の研究の中で全くといってよいほど考慮されずにきた。それは、儒学とくに朱子学が勸懲主義であったことは否定できないので、たとえば、馬琴の勸懲思想は、坪内逍遙によって否定され、そのため、近代文学の立脚点を儒学の否定の上においてきた。つまり、明治の近代文学は儒学思想を否定ないしは克服したものとみなしてしまつたわけである。しかし、二百年以上も日本人の精神を支えてきた思想が一朝一夕で消え去るはずはない。たとえば馬琴を否定した逍遙の中にも儒学的発想は根強く残っているし、二葉亭四迷は、ロシアのペリンスキーなどの観念論美学を摂取するに際し、用語も概念も儒学のもので行つたふしがある。

依田学海に、明治三十年ごろまでではあるが、あれほど序文や碑文を乞う人が多かったということは、学海が一つの權威であつたからであろう。その權威が儒学的教養の与える精神の安定性にあつたであろうことは容易に想像がつく。この妾宅日記によつても、学海の修身・齐家ぶりはみごとである。勿論、その修身の中にも齊家の中にも蓄妾の矛盾意識はない。ただ、学海は、その修身と齊家とが

治国と結びつく位置には明治十八年以降はおかれていない。あえていえば、官を辞した十八年以降は、文学・演劇が治国であつた。このような学海が權威であり続けたということは、明治になつても儒教の世界観や倫理観がなお權威であつたということを物語っている。国家も儒教を復活させている。現在、中国を中心とする東アジアの儒教文化圏の近代的現代的意義が再評価されようとしている。そのようなことも考慮すれば、わが国の近代文学をみる場合、ここに視点を置くこともあながち時代錯誤とはいえないのである。

最後に、本書を読んでつくづくと考えさせられたことは、文学研究ということについてである。今井源衛先生からは、韓国出張中に、この日記を国立中央図書館で発見なさつた由をおうかがひした記憶があるので、それは昭和五十八年の夏だつたと考えられる。それから刊行まで実に四年間が経過している。みよようによつては、たかが妾宅での日記である。失礼ながら必ずしもお若い先生が、それに四年間をかけられたということが、一体どういう意味をもつのか考えさせられるのである。

本書の内容を批評するのはやさしい。依田学海自体が一先行者にすぎない。それに、この日記に出てくるその交友関係によつて新たに明治文学史が大きく書きかえられることはあるまいと。おそらく、その批評は正しいであろう。しかしながら、本書の刊行によつて今まで分らなかつたことが一つ、分つたということは事実である。それでいいではないか、という実感が、五百頁を越す本書を閉じた時に澎湃と浮かんでくるのである。

（今井源衛校訂『依田学海墨水別墅雜録』昭和六十二年四月一日
吉川弘文館 定価八五〇〇円 菊版 五七二頁）